

現代文訳

落穂集

原作 大道寺友山

享保十二年

解題

落穂集解題

―徳川家康一代記―

落穂集は江戸時代中期に大道寺友山が著したもので、写本により若干異なるが前編は徳川家康の一代記で十五巻からなり、後編は江戸幕府初期（三代将軍家光の時代迄）の挿話十巻からなる。

後編十巻はホームページ大船庵で落穂集追加として翻刻及び

現代文訳を既に発表した。此度徳川家康没後四百年目に因み

前編の翻刻及び現代文訳を試みた。前編は徳川家康の出生

（天文十一年、1582年）から豊臣家の大阪城落城（慶長廿年、

1615年）迄年代順に家康の行跡を注進に述べられている。

写本は国立公文書館に数種類あるが、今回解読の底本としては

早稲田大学図書館がネット公開する天保年間の写本を使用させて

戴いた。見開き五百ページ余と量が多いので一巻づつ翻刻、

平成二十七年三月より一巻宛大船庵に翻刻及び現代文訳を発表して同年十二月に完了した。



第一巻の内容は家康誕生から廿六―廿七歳迄の岡崎城主として三河を統一及び遠江国への進出迄。

原文にはサブタイトルがなく一つ書きであるが、現代文には適当なサブタイトルを付けて目次とした。

現代文サブタイトルは

- 一―一 家康、岡崎で誕生後、尾張熱田に幽閉 (0―七歳)
- 一―二 駿河国今川家に寄寓 (八―十七歳)
- 一―三 今川義元の横死と岡崎で自立 (十七―十八歳)
- 一―四 織田信長と和睦 (十八―廿一歳)
- 一―五 一向宗を鎮圧、三河国統一 (廿一―五歳)
- 一―六 遠江国へ進出 (廿五―六歳)

時は足利幕府の中央権力が衰え、各地方の守護大名に代わる戦国大名が輩出し、日本史上では所謂戦国時代と呼ばれた時期である。家康が誕生した三河国（愛知県東部）は尾張国（愛知県西部）の織田家と遠江国（静岡県西部）、駿河国（静岡県中部）、伊豆国（静岡県東部）を支配する今川家の争奪の場であり更に今川家の東には相模国（神奈川県大部分）の後北條家、北には甲斐国（山梨県）の武田家が天下を狙い、夫々生存を掛けた領国拡大を企てていた時代である。

その頃の城は天守閣を持つ近世の城とはイメージが全く違い、山城、砦、要塞のようなものだが現在の一市町村に相当する地域に五―十城位あり夫々に城主がいた。家康が天下を取ると厳しく一国一城制度を打出した。これは若い頃城の取合いに明け暮れた経験から、泰平の時代を作るためには戦のより所となる城をなくすべきと考えたからに違い無い。

落穂集第二卷現代文目次

第二卷は織田信長の支援の下で遠江、駿河を今川家に代り支配する武田家との戦いが中心となる。

- 二―一 金ヶ崎の撤退と姉川の戦い (廿七歳)
- 二―二 武田家と衝突 三方ヶ原敗戦 (廿九歳)
- 二―三 長篠の戦い (三二歳)
- 二―四 武田方長篠余話 (三二―四歳)
- 二―五 武田家の遠江諸城攻略 (三二―四歳)
- 二―六 嫡子信康の自害 (三六歳)
- 二―七 武田家の駿河諸城攻略 (三七―八歳)

落穂集第三卷現代文

第三卷は武田家が滅亡するが織田信長の横死で旧武田領の甲信2国をめぐる争いになり家康が勝、一方織田政権の継承は羽柴秀吉が掌握するが、信長二男信雄の要請で秀吉と対峙し一戦後和睦が成立する。

- 三―一 武田家滅亡と本能寺の変 (三九歳)
- 三―二 甲斐他旧武田領の争奪、北条家と和睦 (四十歳)
- 三―三 秀吉と対立、小牧・長久手の戦い (四一歳)
- 三―四 長久手戦余話

三―五 秀吉と和睦

(四一―二歳)

落穂集第四卷現代文

第四卷は秀吉が天下統一を達成するには家康を味方につける事が必要と考え、種々工作し家康も終に豊臣政権の与党となる。その後、反秀吉として最後に残った大大名の北条家の追討が始まる。

- 四―一 秀吉妹朝日との婚儀 (四二歳)
- 四―二 秀吉政権の与党となる (四二―三歳)
- 四―三 秀吉の天下統一推進 (四四―四六歳)
- 四―四 北条家追討 (四七歳)
- 四―五 関東各地の城攻略

落穂集第五卷現代文

第五卷では小田原の北条家が滅亡し、大名の大幅な国替があり家康は是迄の三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五ヶ国から北条家の跡地関東へ国替となり江戸を居城と定める。豊臣政権は最後に残った伊達政宗が跋扈する奥州の整理をする。

- 五―一 小田原落城と徳川家関東入国 (四七歳)
- 五―二 小田原陣と関東入国余話
- 五―三 豊臣政権の奥州政策

- 五―四 宇都宮陣余話
- 五―五 国替と関東経営
- 五―六 奥州経営と一揆勃発

落穂集第六卷現代文

第六卷では奥州の一揆も収束し全国が平定されると秀吉は関白職を甥の秀次に譲り、自らは太閤と号して朝鮮（明国）への進攻を開始する。その間秀頼が誕生すると間もなく関白秀次を謀叛の罪で切腹させるが、秀吉自身も病となり伏見城で死去する。遺言で朝鮮からの撤退及び秀頼が成長する迄の国政を家康始めとする五大老、五奉行に委任する。

- 六―一 豊臣政権の奥州一揆処理 (四八歳)
- 六―二 秀吉の朝鮮進攻（文禄の役） (四八―五十歳)
- 六―三 名護屋在陣余話
- 六―四 関白秀次の謀叛容疑 (五一歳)
- 六―五 再び朝鮮進攻（慶長の役） (五三―四歳)
- 六―六 蒲生家の所替とその余話
- 六―七 太閤秀吉の死去と朝鮮からの撤兵 (五五歳)

落穂集第七卷現代文

第七卷では秀吉の遺訓で幼君秀頼を擁した五大老、五奉行の体制が始まるが、幼君名代の家康（内府Ⅱ内大臣）と外の大老、奉行との確執を抱えながらの不安定な豊臣政権が走り始める。

- 七―一 家康対四大老五奉行の確執 (五六歳)
- 七―二 前田利家との関係修復
- 七―三 石田三成と七人の外様大名の喧嘩
- 七―四 石田三成の佐和山蟄居
- 七―五 伏見向島から伏見城へ引越し

落穂集第八卷現代文

第八卷では豊臣内閣の中で家康が幼君名代として次第に政治力を強めて行き、政治拠点も大阪城に移す。大名統制の為に人質政策等将来の幕府政治の萌芽が見られ、反徳川勢力との関ヶ原の決戦も近づいてくる。

- 八―一 内府家康の政務始動 (五六歳)
- 八―二 家康暗殺計画の風聞
- 八―三 伏見城から大阪城へ
- 八―四 前田家の苦難
- 八―五 束の間の平和
- 八―六 宇喜田家の内紛

落穂集第九巻現代文

第九巻は慶長五年（1600年）春になっても上洛しない上杉景勝の謀反容疑が固まったと

云う事で家康は政権代表として諸大名を率いて会津討伐に出陣する。その留守に石田三成を中心とする反家康勢力が大坂に結集する。下野国小山の本陣では上方の謀反が明らかになり随行諸大名と会議を開き、会津討伐を中止して上方に攻上る事が決まり東西対決の様相が明確になる。

反対勢力は家康の政務所だった大坂城西の丸を接収し、次に家康預かりの伏見城攻略を目ざす。

九―一 上杉景勝の反逆容疑と会津進発 (五七歳)

九―二 上方反徒蜂起と小山会議開催

九―三 東西決戦に向け武将達の去就

九―四 大谷吉継の義理と友情

九―五 上方反徒大坂に集結

九―六 敵地に孤立した伏見城

落穂集第十巻現代文

第十巻は慶長五年（1600年）七月上方反徒の大軍に攻められた伏見城が陥落し、家康譜代の留守居四人全員が討死する。関東方は福島政則、池田輝政を中心に反徒側の岐阜城を八月廿三日一日で攻落す。これを契機に家康は江戸を出陣して上方に向かい、九月十四日に大垣赤坂の本陣に

入り、翌日九月十五日に関ヶ原の合戦となる。一方秀忠は宇都宮から直接信州上田の真田安房守父子を攻めるが時を費やして結局関ヶ原合戦に間に合わない事になった。

十―一 伏見城の戦い (五七歳)

十―二 織田秀信の不了簡

十―三 岐阜城の戦い

十―四 上田城攻め

十―五 大垣杭瀬川の戦い

十―六 関ヶ原へ

落穂集第十一巻現代文

第十一巻は本書の最大の山場である慶長五年（1600年）九月十五日の関ヶ原合戦である。西軍側の毛利家の中立不戦、小早川秀秋の裏切りなどもあり、朝十時から始まった合戦は午後二時頃には東軍の勝利となった。東西二十万人が参加した関ヶ原合戦は僅か六時間程度で終了する。勝利した家康は戦後策に手を打ち始める。

十一―一 毛利家、小早川家の翻意 (五七歳)

十一―二 関ヶ原合戦前夜

十一―三 合戦開始朝

十一―四 合戦諸将の人間模様

- 十一―五 合戦終わって
- 十一―六 佐和山城攻め

落穂集第十二巻現代文

第十二巻は戦後の処理及び関ヶ原勝利により豊臣政権の五奉行五大老は消滅し、実質的には徳川政治となるが、家康は豊臣秀頼の名代と言う曖昧さも残る。そこで征夷大將軍となり幕府を開き、それを次代に継いで行くという家康の長期戦略が見える。

- 十二―一 秀忠の合流と北陸の戦後処理 (五七歳)
- 十二―二 家康大坂に入城
- 十二―三 家康の論功褒賞 (五八歳)
- 十二―四 東北地方の東西対決
- 十二―五 浮田秀家の其後
- 十二―六 家康征夷大將軍を拝命 (六十歳)
- 十二―七 徳川家の隆盛と世代交代 (六二―六歳)

落穂集第十三巻現代文

第十三巻は家康の大御所政治が始まるが、秀頼が成長するに随い豊臣家の存在が徳川家にとり悩ましいものに成ってゆく。そこで豊臣家で再興した大仏殿の鐘銘の事から、次第に豊臣方に

- 圧迫を加えて暴発を誘う様な様子が見える。 秀頼の家老である片桐市正は和平派で苦心するが、結局豊臣家内部で失脚し第一次大坂戦争(大坂冬の陣)に向かう。
- 十三―一 大御所駿府にて政治を取 (六七歳)
- 十三―二 国家安康鐘銘事件 (七十歳)
- 十三―三 片桐市正の苦心
- 十三―四 和平派片桐の失脚
- 十三―五 大坂冬の陣臨戦態勢
- 十三―六 第一次大坂戦争始まる

落穂集第十四巻現代文

第十四巻は大御所家康、將軍秀忠共に大坂に陣を移し大坂城攻撃が始まる。 堅固な大坂城に攻込む事は難しいが、周囲からの絶え間ない砲撃と一斉銃撃に悩まされた強硬派の淀も和睦に動く。徳川方も和睦を勧め条件等が提示され和睦が成立する。 和睦条件で大坂城の外回り総堀埋め立てと二の丸及び三の丸の堀を取り壊す事だったが、幕府側は総堀だけでなく二の丸、三の丸の堀迄埋めしてしまう。そこで豊臣方は再び戦争準備を進め慶長廿年の夏の陣に向かう。大坂勢は初戦で郡山城を占拠するが榎井(泉佐野)で紀州勢に敗れる

- 十四―一 大御所、將軍大坂に出陣 (七一歳)
- 十四―二 今福、鳴野の戦い

- 十四―三 大坂城攻撃始まる
- 十四―五 和談の動き
- 十四―五 大坂城総堀埋め立て
- 十四―六 大坂夏の陣の足音
- 十四―七 榎井の戦い

(七十二歳)

落穂集第十五巻(完) 現代文

第十五巻は最終巻である。慶長廿(1615)年五月五日大御所家康、将軍秀忠は夫々京都二条城、伏見城を出発、幕府軍を率い大和路を経由して大坂城の南から進撃する。一方大坂方は城外へ出て対陣し、五月六日には道明寺及び八尾・若江で合戦があり大坂方の著名な武将達が討死する。五月七日には天王寺付近と岡山付近で最後の決戦があり真田幸村も討死し大坂方の敗北が決まる。城内では謀反人による台所の放火で本丸全体に火が広がる中で城に引揚げた武将達が自害、千姫が秀頼助命の為出城するが色々行違いもあり五月八日の朝には秀頼、淀も自害し豊臣家は完全に亡びる。

其年の七月、元号も慶長から元和と替わり、長い戦国時代も漸く終わり天下泰平の時代となる。

- 十五―一 道明寺の戦い

(七十二歳)

- 十五―二 八尾・若江の戦い

- 十五―三 最後の決戦前夜と翌朝

- 十五―四 天王寺・岡山の決戦
- 十五―五 大坂城炎上と千姫の出城
- 十五―六 豊臣家の滅亡

あとがき

今回の落穂集は江戸中期の大道寺友山著作の中で最も長編、且代表作であり取組みに多少躊躇もあった。特にこの落穂集前編の活字化の記録は見当たらず勿論現代文訳はない。今年には退職後古文書の勉強を始めて十年、徳川家康没後四百年の節目であり、今しかないと思いい翻刻と現代文合わせて五十万字に挑戦した次第である。何とか予定通り完了する事ができたが、この間

大道寺友山縁故の方を始め多くの友人達に励まされた事を改めて感謝したい。(2015.12.24 大船庵)